



《歴史と災害》をめぐる私的経験について

上村, 武男

(Citation)

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 10:33-40

(Issue Date)

2012-01-29

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003762>



水堂須佐男神社宮司 上村武男

はしがき

わたしは、詩歌、文芸批評、小説、評伝、紀行、哲学的思索集、家族史、保育記録、随筆などの作品を、十代のおわりから書き続けている作家であり、それと同時に兵庫県の南東の隅っこ、すなわち尼崎でちいさな村やしろの宮司をつとめる神職でもある。阪神大震災が生起した1995年(平成7年)——このときわが社は拝殿その他の社殿が全壊、崩れ落ちてしまったのであるが——の翌年までは、ごく小規模な私立幼稚園の園長兼理事長でもあった。

このように、いわば物書きと神主と園長せんせいという〈三足のワラジ〉をいっしょに履いていたような経歴(歴史)を持つ、五十歳を過ぎたばかりの人間。年老いた母、そして妻と中学、高校の二人の子を抱かえた家族持ちの男。それが、そのまま突然、あの阪神大震災の直撃を受けた。

すべてが、不意打ちであった。社殿倒壊という被災の現実、わが家にとって甚大であった。

〈「お父さん、神社やめてどっか行こ」中学の息子が真顔で言い寄る たけを〉

この拙歌のとおり、巨大なガレキの山と化した社殿の無残なすがたを、じっと無言で眺めているほかない幾日かから、わたしの〈震災復興社殿再建〉への五年間の、未知の道程がはじまった。

だが、わたし自身の気持は、1月17日払暁の、あの地震発生直後から、なぜか、あんがい平静であった。家族の様子を確認したあと、すぐに愛用のキャノン一眼レフのカメラで、フィルムがあるかぎり、社殿、境内、わが家(社務所)、園舎の被災現場の写真を撮りまくった。そのとき、フィルムは36枚撮りが3本、奇跡の如くに残っていた。

しかし、この被災直後のわたしの、物に憑かれたような撮影行動は、のちに家族の者から「あれはおかしい」と言われた。そうであったかもしれない。けれど、わたしはそうして阪神大震災の〈歴史的瞬間〉を映像に遺すことが出来たのである。

そればかりではない。わたしの撮影行動は、震災翌年の閉園にともなう園舎解体、平成10年の社殿再建竣工、その翌年の社務所解体新築にいたるまで続いた。そこで一段落したとあってよい。写真の枚数は、1200枚ほどに及んでいた。

ある日、兵庫県から委託された「阪神・淡路大震災史料調査センター」の調査員だという男性が二人、わたしのところへやって来て、『須佐男神社震災復興記念誌』をお出しになっているのを見せていただいたのですが、何か震災資料でお借りできるようなものはあ

りませんか」という。それならば此の記念誌の原資料になった写真が、たくさんありますが、と応えると、それをすべて一時、貸して欲しいとのことで、わたしは快諾した。いま、そのスキャンしたものが「人と防災未来センター」(当初は「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」という名称であったか)に保管、時には展示されているはずである。よもや、どこに行ったか分からん、などということはあるまいと思うが――。

それでは、以下に、わたしが阪神大震災発生直後から〈認識〉し、〈記録〉し、また〈伝え〉てきた事柄を、簡潔に個条書きにして示したい。

■ わたしが〈直観もしくは認識〉したこと

1 「もの皆は、ことごとく崩れ去る」ということ。→廃墟と建築

参照A——有島武郎・原民喜・三島由紀夫

参照B——関東大震災・室戸台風・太平洋戦争
阪神大震災・東日本大震災

2 「震災直後、ひと皆、ちょっと哲学者みたいな顔をしていた」ということ。→極度の亡失と、思わぬ覚醒・驚愕と悲哀

参照——「哲学は人生の悲哀に始まらねばならない」(西田幾多郎)

「かなしみ、それは思索と実践の原動力。かなしみこそ、力である」(上村武男)

3 「天も嘆き驚き、地も揺れ動く」ということ。→天変地異と日常平静との同棲・驚天動地な出来事と日常生活の出来事とのあいだの距離の縮圧

参照——「天災は忘れたころにやって来る」(寺田虎彦)

「天災は忘れなくてもやって来る」(上村武男)

4 「われわれは生の唯中において死の中に在る」ということ。→生と死 生と死との不可分離性・重層的関係・逆接的対応の世界

参照——「なんべん理知がおしえてもわたしのこのさみしさは治らない」(宮澤賢次)

「生は死の棲み家/死は生の帰り道」(上村武男)

「在るときはありの荒みに過ぎしものを無くてぞひとの恋しかるべき」(拙歌)

5 「わたしは、たいへん非力だ。しかしわたしはこれから、ひとりの在野の歴史の記録者となって生き延びるべき人間だ」ということ。→大災害がもたらした歴史的世界への覚醒・〈いまはむかし、むかしはいま〉・ジャーナリスト魂

- 6 「ひとは誰もほんとうは助けてくれない。わたしは自分で自分を救助しよう」ということ。→災害援助と自力復興との、むつかしく、なやましい関係・ひとは死ぬべきときに死ぬ、救われるべきときに救われる。

参照——「ひとは死に切り、自然は水際だっている」(高村光太郎)

■ わたしが〈記録〉したこと

- 1 被災直後(1995. 1.17 払暁)から4、5年間の、主として神社の被災と復興との、刻々の現場写真1200枚あまり。この写真群は、のちにわたしの頼りない〈記憶〉の力の大的なる助けとなったが、誰に依頼されたのでもなく、こうして写真を撮り続けることは、わたしを建設的な考えにさせる〈導きの糸〉ともなったようだ。あの朝から17年、いまそれらの写真は兵庫県の「人と防災センター」に保管されているとともに、原版はわたしが所蔵している。→映像による記録

補記：ある年、息子が大学の卒論テーマを〈阪神大震災と神社〉と決めて、それならばと、まだ出来て間もない「人と防災センター」へ息子と二人で見学に行ったことがある。印象は強烈で、なかでも〈自然史〉の展示・解説のコーナーが良かったという記憶が残っている。

- 2 震災の翌年3月に、園児減少によって閉園(学校法人の解散)をした私立水堂幼稚園の、戦後間もなくから半世紀に及ぶ地域に根差した幼児教育の歴史を、写真集のかたちで出版した。これは、閉園式で頒布したあと、いまだに神社にお参りに来た卒園生にプレゼントしてよろこばれている。もちろん、尼崎市の図書館、地域研究史料館、教育センターなどに寄贈したことはいうまでもない。また、昭和20年代の貴重な教材類——紙芝居、絵本、楽譜、レコードなど——は、大阪・吹田の「国際児童文学館」に寄贈した。その文学館がいま、危うい。→『水堂幼稚園五十年誌 1947-1996』(編著・学校法人水堂学園)→映像による記録

補記；国際児童文学館は、当時、環境・施設・中身のすべてがすばらしかった。それがいまや廃館、蔵書は府立中之島図書館の倉庫に詰め込まれているという。さみしいではないか。地域の文化・歴史・思想の拠点たるべき図書館や文書館や博物館や美術館が、だんだん情けない状況になって来ている。わたしの多量の寄贈品は、大丈夫か？

- 3 伝記(家族史)、歴史記録などの執筆・出版。——若い日(明治36年前後)の祖母の足跡を探索する旅の記録を、伝記のように、小説のように綴った『春の欄干』(1997・編集工房ノア)、父が遺していた尋常小学校3年から6年にかけての日記を、当時の父の「綴り方」とともに編んだ『大正の小さな日記帳から』(2000・同前)、父の没後30年の節

目に作った、詳細な解説つきの写真集『父の肖像』(2007・私家版)、同じく父が戦時中に自社で必勝祈願日拝会を実施して話した未公開の講話録を、編集・解題して出した『戦中講話——ある神官の戦争』(2009・同前)など、自分の肉親にかんする伝記的著述を書き続けた。→言語による記録

補記:わたしは近年、とみに強く感受するようになっていく——〈歴史とは、所詮、個人の伝記の累積である〉と。そして〈個人の伝記というものは、語り伝えたり書き残したりしないかぎり、生活史のふかい泥の地下に埋もれてしまうものだ〉と。だから〈埋もれてしまった完璧な沈黙(死者)の場所にさえ、聞き分けられないほど幽かな声を聴きにいくことこそが、歴史家の仕事であるにちがいない〉と。わたしは現在、自分に連なる、江戸中期(文化・文政ころ)からの「わが神職累代の記」というものを書いている。

- 4 阪神大震災の直撃を受けた自社は、文字通りに〈禍を福に転じ〉て、多くの人々の助力と愛情とでもって奇跡的な災害復興を、4年後に成し遂げた。その4年間の記録を、写真と関係文書とでまとめた『須佐男神社震災復興記念誌』(1999・水堂須佐男神社震災復興実行委員会)を発刊した。A5判171ページ。罹災証明書、わたしが下書きした社殿設計図、事業計画書、募財趣意書から、宮司の折々の文章(10篇)、地鎮祭や竣工式の祝詞、新聞報道記事、事業会計報告、寄金奉納者奉名簿にいたるまでの文書。そして倒壊直後の拝殿・手水舎などから、みごとに造営成った新社殿の写真まで——。

補記; 生田神社や湊川神社や西宮神社などの大社は、当然のことながら、それぞれにりっぱな大部の復興記念誌を発行している。しかし、わが社のような吹けば飛ぶような小社が、まとまった震災記録を出した例を、わたしは寡聞にして知らない。

- 5 自然がもたらす災害は地震や津波に限らない。台風(暴風雨・高潮・洪水など)もまた、日本列島の自然災害史において、重要な、代表的位置を占めている。ジェーン台風(1950)、伊勢湾台風(1959)、第二室戸台風(1961)……わたしはその「第二」ではなく、昭和9年(1934)の室戸台風について、ことに甚大な被害を出した学校災害の(実況)を執念ぶかく探索し、『災害が学校を襲うとき——ある室戸台風の記録』(2011・創元社)という本を書いた。それを書き上げ、書名も決めたその翌日、東日本大震災が襲った。

補記; 災害資料などというものは、きわめて地味な色合いで、死んだように書庫か倉庫か箱詰めの中かで眠っている。それを息吹きかえらせ、いきいきと立ち上がらせることができるのは、ただ、それを貪り食うかのごとくに調べ、読み、眺め、何事かを見出そうと意志する閲覧者や調査研究者たちの存在にほかならない。あらゆる歴史資料はひとを動かす力を持っているであろうが、資料がひとを活か

すというよりは、ひとが資料を活かすのだ。『災害が学校を襲うとき』を20年以上かけて、やっと仕上げたときの実感のひとつである。

- 6 阪神大震災は、もともと詩人哲学徒肌な思索の人間のわたしを、大きく歴史づかせた。そして、以下のような文章を書かせたといつてよい。

「室戸台風と江戸箆笥」(『地域史研究』89号〈尼崎市地域研究史料館〉・2001)

「ある市民スタディワークの試み——尼崎・富松城跡を活かすまちづくりの活動にふれて」(『歴史と神戸』233号〈神戸史学会〉・2002)

「水堂村絵図を読む——江戸の古地図から」(『社報スサノオ』3号〈水堂須佐男神社〉・2003)

「小さな司馬遷——『尼崎市戦前教育史』の発刊にふれて」(『地域史研究』97号・2004)

「移りゆく街の姿と伝えたい歴史」(「FMあまがさき」放送抄・『社報スサノオ』8号・2005)

「父祖の地、母なる記憶の風景——『姫路の神社』を読む」(『社報スサノオ』9号・2006)

「蔵の中から教育史」(『地域史研究』102号・2006、『兵庫神祇』576号に再録・2007)

「『図説 尼崎の歴史』に関する断想」(『歴史と神戸』262号・2007)

「わたしの生まれた場所」(『地域史研究』105号・2008、『北半球』4号〈県立尼崎北高校10期生同人誌〉に再録・2009)

「新刊紹介『災害がほんとうに襲ったとき』(中井久夫・みすゞ書房・2011)」(『兵庫神祇』590号・2011)

補注；「蔵の中から教育史」という変な名前の文章は、震災数年後に神社の近くの旧家が土蔵を解体、そこに仕舞われていた膨大な江戸期以来の古文書類が尼崎市地域研究史料館の手によって調査された。その中に、明治20年代から大正初期にかけての地元の尋常小学校と高等女学校の史料——教科書・ノート・作文帖・成績簿・学校便りなどが、どっさりとあり、わたしはそれらにじかに接し、触れ、読み、写真に撮る機会に恵まれた。わたしは、ふかく感嘆した。それこそ〈地域歴史文化〉の原風景と立ち会った、その感動が覚めやらぬうちに、一気に書いたのがこのエッセーである。大災害は、夥しい書類を消滅させる。しかし、災害があったゆえに光が当たり、よみがえってくるものもまた、いろいろとある。災害というものが含んでいる両義性とでもいうべきか。

■ わたしが〈伝え〉たこと

- 1 「阪神大震災のあとに〈破壊し尽す力・揺れ動く大地・ガレキの山・おひなまつりがやってくる・あす、生活発表会〉」(水堂幼稚園保育便り『週刊子らとともに』に連載・1995)。文字通り、被災直後の声である。

2 「阪神大震災から七年目の春」「須佐男神社あれこれ問答」(『社報スサノオ』創刊号・2002)。震災後、考えに考えて、はじめて〈社報〉を年2回出すことにした。復興寄金をいただいた方々に宛ててのものであった。毎号1000部。10号まで発行した。

3 「記憶のとおい空」「阪神大震災十年記念《わが町いまむかし展》を開催」(『社報スサノオ』7号・2005)。震災10年、何か新しく思い切ったことを実践しなければ、わたしの心の井戸が溢れ出しそうであった。

4 そして、この《わが町いまむかし展》と名付けた、1キロ四方ぐらいの地域(当社の氏子範囲・むかしの〈大字水堂村〉)の新旧の地図と写真とでたどる展示会を、平成17年1月の2週間、自社社務所2階全部を会場にして開催した。展示写真約400点、地図45点。なぜ、こんなに多数の展示品が集まったか——それは、発案者である宮司(わたし)の孤軍奮闘もさることながら、思いかけない地域の人たちの史料提供が相俟って、いわば相乗効果を生んだからにほかならない。会期中は氏子総代をはじめとたくさんの地域住民の方々の助力・協賛を得た。1月17日をはさむ2週間の参観者は、誰の予想をもはるかに超える1500名に達した。

補記；わたしの最初の目論見は、展示品10~20点、会期数日、参観者50~100名というものであった。それがこういう驚くべき結果になったのは、阪神大震災がひとびとにもたらした心身の影響の奥深さにほかならない。ある日、一瞬にして消滅・崩壊するかもしれない〈わが町〉の〈いまむかし〉を、ひと目、見ておきたいという、素朴にして生活深層に達する思いの現われ以外の何者でもないであろう。ささやかながら、こうした展示会を発案・主宰・実行することが出来たことは、いまもって、わたしの大きな誇りである。

5 とはいっても、展示会というものは、その場限りのものだといってよい。会期が終れば、「はい、それでおしまい」である。その意味では、むなしい。わたしはその〈むなしさ〉に耐えられず、この2度とはありえない展示会の〈全記録〉をこしらえて、年月の果敢なさ・残酷さ・取り返しのつかなさ……に対峙しようと考えた。それさえもむなしいといってしまえばそれまでだが、それではいわば〈災害の歴史化〉——災害というものを歴史の唯中において位置を占めさせ、活かす仕事に失敗し、敗北することにならないか。この多量の展示史料は、いつかは散逸するに決っている。あの大震災の経験・記憶だって、いつしか忘却のふかい海の底へ沈んでいくのである。

補記；これはさきの「わたしが記録したこと」に属するのでもあるが、『全記録わが町いまむかし展 尼崎水堂立花ひとつの地域図誌』(B5判上製本・161ページ・水堂須佐男神社)を、平成17年の6月に発刊した。頒価2500円で、1500部つくっ

た。ビジュアルな本だが、内容目次だけでも摘出すると――

- 序・尼崎市長白井文 跋・水堂須佐男神社総代会長小笠原文治、尼崎市立地域研究資料館職員中村光夫、尼崎市立中央図書館司書清水香里、富松神社宮司善見壽男、宮司婦人上村貞子
- 展示会ごあいさつ(主催者からのメッセージ)・発刊の辞 上村武男
- 展示作品《地図》「水堂村」の絵図・古地図(カラー版、江戸寛文期～昭和戦前期)、わが町の地図いろいろ(慶長 10 年～平成 16 年)
- 展示作品《写真》氏神の光景、まつり・まつり・まつり、水堂小学校、水堂町あたり、立花駅・立花商店街あたり、阪急武庫之荘駅南側一帯、学校・幼稚園・保育施設・寺院・教会、川の流にそって、辻々の小祠たち、いまはなき家々の表情、水堂古墳、高みからの眺め(航空写真)
- 《コラム・エッセー・新聞記事など》展示会ポスター(三上沙織)・「水堂村絵図」を読む、水堂の野と母校、石に刻まれた江戸、記憶のとおい空(上村武男)・尼崎市災害年表(尼崎市文化財収蔵庫)・わが町尼崎市水堂町(読売新聞、1978・8・21)、国鉄貨物列車脱線(神戸新聞、1978・10・24)、阪神土曜プラザ尼崎・水堂(毎日新聞、1979・10・20)、立花を中心に尼崎の文化人村(神戸新聞、1951・12・16)、開かずの水堂踏切(朝日新聞、1968・4・17)、『慰問写真帖』あいさつ文(立花村水堂銃後奉公会、1941・2)、変わる景観(辻川敦)、展示会作品募集広告
- 展示会場の光景――準備から打ち上げまで
- 「享保 18 年水堂村絵図」(カラー全図・折り込み)

- 6 この〈わが町いまむかし展〉の開催と、その〈全記録〉の発刊が済んだと思ったら、翌平成 18 年の秋、「尼崎市制 90 周年記念 尼崎の歴史展 第 3 部市民参加コーナー」に出品・展示を依頼された。会期中の半分、約 10 日間を受け持つてほしいという。わたしは喜んで引き受けた。が、前年の踏襲・縮小版ではおもしろくない。そこで展示品の半分以上を新たに選び、展示構成も変えた。展示品は 38 点。この記念展は尼崎市・尼崎市教育委員会・のじぎく兵庫国体尼崎市実行委員会が主催で、神戸大学文学部地域連携センターの協力を得て実施された、大きな催しであった。わたしはこのときには、展示開始と同時に、展示案内図録「水堂立花いまむかしの姿」(カラー・6 ページ)を作成したのであった。会期中、毎日のように展示コーナーの入口に坐って、わたしは来場者にそれを手渡した。

補記；ある日、こんなことがあった。わたしは自分の小・中学 9 年分の通信簿・通知表(1949～1958)を、もうこれも〈歴史資料〉になったと考えて展示していた。するとそれをかなり熱心に見ていた若い女性がわたしに尋ねる――「あその通信簿に名前が出ているウエムラタケオというひとは、ここに来られることがあるのでしょうか」「それは……わたしです」。はなしを聞いてみると、じつは『大正

の小さな日記帳から』(さきに挙げた父の尋常小学校時代の日記と作文を編集した本)を読んで、歴史を志すようになった者で、いま神戸大学で歴史を学ぶ学生だという。相手は大いに驚いていたが、わたしのほうこそ、こんなしあわせな僥倖にこそ和む出来事があるとは、夢を見ているような具合であった。

- 7 その夢の続きがある。そのとき知り合った神戸大の歴史専攻女子学生ふたりに、展示の細かい段取りを手伝ってもらい、わたしは〈水堂立花・地域歴史展第3弾〉として、さきにも挙げた『戦中講話——ある神官の戦争』を主題とした展示会《いま、「戦争と神官」を再考する——ふたたび戦火の時代をつくらないために》を、また自社の社務所で開催した。災害史料といっても、地震や豪雨や台風といった自然災害ではなく、いわば戦争災害の方の事柄になるが、会期は平成21年2月から3月にかけての4日間であった。「この男、よほど展示会が好きなんだ」と思われるかもしれないが、展示会はあくまでも何事かを伝えるための〈手段〉であって、決して〈目的〉ではない。あたかもそれが自己目的であるかのような展示会・作品展・博覧会・美術展などが、平気で毎年、どこかで必ず開かれているが、間違っているであろう。わたしのこの展示会の〈目的〉は、埋もれた歴史的史料の発掘であり、若き日の〈悲劇の神官〉たる父の姿を顕現させることであり、戦火がない世の実現というところにあつた。

補記；この展示会のあと、同じ年の7月には尼崎市教育委員会主催の毎月開かれる〈水曜歴史講座〉で、「ある神官の戦争」と題したはなしをした。また、この年は3月に新旧対比写真集の豪華本『保存版 尼崎の今昔』(監修・執筆、郷土出版社)も発刊されて、これに関連した講演などの依頼が、いまでも続いている。まことに〈歴史づいて〉いるのである。しかも、わたしは専門の歴史研究者でも学者でもなんでもない。つまるところ、ただ一介の物書きなのである。

後記；今回、「地域歴史文化の形成と災害史料」というテーマを掲げた、第10回・歴史文化をめぐる地域連携協議会に、コメントを依頼されたのを機に、このように、わたし自身が阪神大震災直後から現在にいたるまでに、〈歴史と災害〉に関して感じてきたこと、考えてきたことをいわば俯瞰し、総括し、再見することが出来たようにおもう。これは、たいへんにありがたいことであつた。あまりご参考にはならないかもしれないけれども——。

なお、神職としては、40年来の宿題を果たして、祝詞論『ふかい森の奥の池の静謐——古代・祝詞・スサノオ』(白地社・2011)を出版し、へたの横好きの歌詠みとしては、歌集『かなしみの陽だまり』(同前・2008)を編んだことを付記しておきたい。

第10回 歴史文化をめぐる地域連携協議会

「地域歴史文化の形成と災害資料

—認識すること・記録すること・伝えることの意味を考える—

2012年1月29日発行

発行：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

TEL 078-803-5566

メールアドレス area-c@lit.kobe-u.ac.jp

ホームページ <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/welcome.html>

印刷：神戸大学生協コーププリントショップ

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町

TEL 078-881-8847
